

道徳教育における「先人の伝記」型教材の 系譜からみた教育的効用について

— 近世から近代(国定修身教科書)までの教科書を概観して —

渡 邊 毅

1 はじめに

中央教育審議会答申「新しい時代を拓く心を育てるために一次世代を育てる心を失う危機—」(平成10年6月30日)は、

「調査によれば、相当数の子どもが道徳の授業を楽しめないと感じる理由として『資料がつまらないから』ということを挙げており、教材の在りようが道徳の学習に対する子供たちの興味・関心を失わせる大きな要因になっている」

とし、子供たちの心に響く教材の改善の必要性を述べている。そして、そのためには従来多く使用されてきた物語作品だけでなく、「偉人の伝記を再評価し……発掘して活用するなどの取組が望まれる」としている。

この答申は平成20年に改訂された『学習指導要領』に反映され、「第3章 道徳」の「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」の中に、小中学校ともに「先人の伝記、自然、伝統と文化、スポーツなどを題材とし、児童〔生徒〕が感動を覚えるような魅力的な教材の開発や活用を通して、児童〔生徒〕の発達の段階や特性等を考慮した創意工夫ある指導を行うこと」という文言が新たに入れられることとなった。

文部科学省編『中学校学習指導要領解説 道徳編』(平成20年7月)に「先人の伝記には、多様な生き方が織り込まれ、生きる勇気や知恵などを感じ取る

ことができるとともに、人間としての弱さを吐露する姿などにも接し、生きることの魅力や意味の深さについて考えを深めることができる」としているように、先人の生き方は子供たちに「生きる勇気や知恵」を与え、「生きることの魅力や意味の深さについて考えを深める」ヒントをもたらしてくれるだろう。先人の生き方は子供たちの生き方の「鑑」であり「手本」であるのである。

ところが、今日そうした「先人の伝記」を活用した授業実践は積極的に行われていないし、教材資料も充実していないのが現状である。¹⁾しかし、道德教育の必要性、充実化がさらに一層叫ばれる今日、「先人の伝記」型教材の見直しと、その作成と活用、授業研究はますます必要になってくると考えられるのである。

そこで、本稿では「先人の伝記」型教材の「再評価」を行うために、近世から国定修身教科書が使用された昭和前期までの教育機関（私塾なども含める）で使用された「先人の伝記」型教材の系譜を辿り、それがいかに広範かつ長期にわたって編纂され重用されてきたかということを明らかにし、道德教育におけるその教育的効用の一端を探り出し明らかにしていきたいと思う。

なお、本稿における「先人の伝記」型教材とは、「道德教育教材用として道徳的に優れた人物（教材使用者からみて近時の人物も含める）の言行などを書き記したもの（「先人」自身が書き記したものも含める）」としておく。

2 近世における「先人の伝記」型教材の活用の実際

(1) 庶民の場合

庶民の教育機関として重要な役割を果たしたのが寺子屋である。寺子屋で教えられていた教科目を見ると、「習字」「読書」「算術」の他に「修身」を置いている寺子屋も存在するが、特に道德教育に関する教科を置いていなくとも習字読書の中で知識技能習得と平行して道德教育が行われていたようである。²⁾つまり、素読の教科書には『大学』や『論語』などの四書がよく使用されていたから、素読と同時に儒教道德を学んでいたことになる。³⁾

「一に菅公、二に道風、三四並べる人が無し」⁴⁾と言われるほどに寺子屋では菅原道真や小野道風が崇敬されたという。手習いの入門時には天神の社に参詣

し、天満宮の祭日には菅神を祭り、天神経を読んだり、よく書けた習字を奉納したりした。道真は学問の祖神として寺子屋でこぞって崇められたのである。

寺子屋で使用された教科書に「往来物」があるが、『菅丞相往来』（寛政5年、1793刊、十返舎一九撰）、『菅神御一代文章』（文政6年、1823、同撰）といった菅原道真を題材とした伝記型の教科書が作られている。『菅丞相往来』の冒頭に「爰に天満大自在天神の御威徳を、おそれみおそれみ筆記して、入学の幼童に信心をとらしむる基を与へんとす」⁵⁾とあるように、これは道真への崇敬心を育んだ教材といえるし、これによって道真崇敬心教化も図られたのだろう。

伝記型の「往来物」は、ほとんど十返舎一九（1765-1831）が手がけており、上記著作の他に『新撰 曾我往来』（文政6年、1823刊）、『甲申新版 英将義家往来』（同年刊）、『弓勢 為朝往来』（同年刊）、『甲申新版 義経勇壮往来』（同年刊）、『甲申新版 楠三代往来』（同年刊）、『甲申新版 栄達足利往来』（同年刊）、『甲申新版 頼光山入往来』（文政7年、1824刊）などがあり、その多くは源平期や南北朝期の歴史に取材されている。

こうした伝記型「往来物」が書かれた背景には、『甲申新版 英将義家往来』の「緒言」に「十返舎一九識」として「昔の名将、勇士が軍勞の事を、往来の書に綴り、初学の児童にあたへなば、乱世の時の苦を思ひやり、今太平国恩難有事を身に染ならん」⁶⁾とあるように、昔の名将の歴史によって現在の平和や国の恩恵を初学者の子供に教えようという意図があったようである。

伝記型「往来物」に一九が関わったことについては、丹和浩が「一九は、片方であまり上品でない笑いの文学を生み出しながら、もう一方でなんとかして子どもたちを導いてゆきたいという思いを抱いていたと考えられる。この思いは、戯作を手がけ始めた当初から、晩年に至るまで、一貫して持ち続けていたと考えられよう」⁷⁾と述べ分析しているが、この「往来物」編纂の背景には、編者一九の道徳的教訓意識が働いていたと考えられるのである。

通史的な内容を漢詩形態で書いた「千字文」と称される「往来物」もある。これは初学者の読み書き用の教科書として用いられた古代中国（6世紀）の周興嗣作の『千字文』に倣って編述されたもので、読書・習字・徳育用として使

用された。こうした日本版『千字文』は12世紀に出現（三善為康作『続千字文』）し、江戸期にその出版が活発化し、広く流布した。そして、この江戸期において特徴的なのは、日本史を叙述した「千字文」の台頭である⁸⁾。

「千字文」はその名のとおり、その多くの形式は4言1句として250句、つまり一千字で構成される漢詩形で表現され、暗誦もしやすくなっている。日本史を叙述した「千字文」の先蹤は『本朝千字文』とされている。⁹⁾日本開闢から徳川政権確立までが綴られている。この最も古い版は江戸中期の安永4年(1775)に出ている。

嘉永3年(1850)版の「板元の序文」には「日本開闢より今代に至るまでの故事をあつめ、人の善悪、世の盛衰移り変に随ひ、其次第を序で、千字なしぬ。尤韻字を押ずといへども、同字をはぶき、初童の便りとす」¹⁰⁾とあって、この「千字文」も歴史の「故事」によって、道義的な教えを初学の子供に伝えようと編まれたものであった。人物画の挿絵も挿入され鎮西八郎為朝、池禅尼、平重盛、源義経、源頼朝、足利尊氏、楠木正成などが登場し、各人物のエピソードが仮名書きで注記されている。例えば『本朝千字文』の「諫爺全孝」の句にはその「傍注」(戸川後学傍注)として、「小松の重盛、父清盛の悪道なるをなげきかなしみ、いろいろに品をかへていさめ、孝行をつくされしゆへ、世の人、賢人なりしと、もてはやしぬ」¹¹⁾とか「忠誠独歩」には「楠正成、湊川にて討死せしかど、忠義においては、古今にひいで、日本に只一人と誉むる事を独歩といふ」¹²⁾とかいったように記されている。したがって、これも「伝記」的な教材としての要素を有しているといえる。

江戸後期になると『絵入 皇朝三字経』(鶴鶴斎春水著、嘉永6年、1853刊)、『皇国三字史』(生方鼎斎著、安政3年、1856刊)、『本朝三字経』(大橋若水著、安政5年1858刊)、『大統歌』(鹽谷世弘著、安政6年、1859刊)など、通史的「千字文」教科書はますます普及し版を重ねた。これら通史的「千字文」に共通しているのは、尊王思想や国体論を色濃く打ち出しているところである。これは幕末の思想状況を反映したものであるともいえるし、庶民への尊王思想鼓舞・醸成の一翼を担った教材ともいえるだろう。

ロシア正教宣教師ニコライ (Arkhiiepiskop Otets Nikolai, 本名 Ioan

Dimitrovich Kasatkin, 1836-1912) は文久元年(1861)6月つまり幕末期に來日しているが、彼はあらゆる階層にゆきわたっている日本の教育について述べている中で、次のようなことを指摘している。

「どんな辺鄙な寒村へ行っても、頼朝、義経、楠木、正成〔楠木と正成の間が点で切れている〕等々の歴史上の人物を知らなかったり、江戸や都その他の重だつた土地が自分の村の北の方角にあるのか西の方角にあるのかわからないような、それほど無知なものに出会うことはない。／春、道を行くと子供たちが凧を揚げているのに出会う。その凧に描かれている異様な人の顔のことが知りたくなくて、子供たちに、それは誰を描いたものなのかと尋ねてみる。子供たちは口々に先を競って言うだろう、清盛だ、尊氏だ、等々と。そして、きっと語って聞かせてくれるだろう。母親や兄が、凧を出して糸を整えたりしてやりながら、その子供たちにこうした歴史上の人物たちのことを語ってくれたのである。／あるいは、街頭に娘が二人立ちどまって、一冊の本の中の絵を見ている。一人が、いま買ったばかりのものを仲良しの友だちに自慢して見せているのだ。その本というのが、ある歴史小説なのだ¹³⁾

このニコライの報告から、①源頼朝、楠木正成などの人物のエピソードなどが広範囲にわたって庶民たちに知られていたこと、②そうしたエピソードの知識は教科書だけでなく凧といった玩具や貸本屋などの「歴史小説」などからも得ていたであろうということがわかるのである。

絵の入った「歴史小説」とはどのようなものなのだろうか。幕末期には絵本によって徳育教化を図ろうとする絵画教授書なるものが数多く登場してくる。¹⁴⁾中には『絵本北条五代記』(師宣風著、万治2年、1658刊)、『絵本太閤記』(岡田玉山画、寛政9年、1797刊)、『絵本楠公記』(山田得翁斎著、春暁斎恒章画、文化6年、1809刊)など歴史的題材による教訓・啓蒙型絵本が出ている。これらは名将武勇の姿を通して忠孝の徳や勤善懲悪を教示しようとする内容の書だが、こうした類の書を絵の入った「歴史小説」とニコライは言ったのだろうか。

「今楠公」と呼ばれた尊攘派の志士・真木和泉守(1813-1864)が文久2年

(1862) 6月、藩主に上った書「藩公に上りし書(二)」に「保臣〔真木和泉守〕卑賤譎劣に候へ共、成童後より、皇室恢復之御座候」¹⁵⁾と述べているが、成童後(15, 6歳ごろ)から維新の志を抱くようになったのは少年の日『絵本楠公記』を読んで楠木正成を敬慕し正成の生き方を目標にするようになったからだとされているから¹⁶⁾、その教育的効果は大きかったと言わざるを得ない。

一方幕府でも、寛政改革期に儒官・柴野栗山(1736-1807)のすすめに応じた松平定信(1758-1829)の命によって、林大学頭以下学問所の関係者が作成した『官刻孝義録』(全50冊)という思想善導のための啓蒙書があった。これは幕府が全国各地で表彰された善行者の事例を整理して享和元年(1801)に刊行したものである。表彰対象の徳目は、孝行、忠義、忠孝、貞節、兄弟睦、家内睦、一族睦、風俗宜、潔白、奇特、農業出精の11種であった。本書出版に際し、当時幕府の支配勘定という役職に就いていた太田南畝(1749-1823)が編纂に協力し、塙保己一(1746-1822)の和学講談所が校閲を行っている。太田は狂歌、洒落本の作者としても知られており、平易な和文で記すために太田の助力が必要とされたのであった。

『孝義録』の編纂・刊行のねらいは、その凡例に「見る人興起するの心あらば風化の一助ともなりなん」とあるように庶民たちに善行者の生き方の手本を示し風教を維持することにあった。したがって、『孝義録』は徳育教化の教材として全国各地に市販された。ただし、本書は大部な刊行物であり経済的な事情から、庶民の多くがこれを十分に活用することはできなかったようである。¹⁷⁾

(2) 武家の場合

既にこの『孝義録』刊行以前に、津藩、会津藩、筑前藩、土佐藩、小浜藩などの諸藩では孝子伝や良民伝が編集・刊行されていた。これら書籍の刊行が『孝義録』編纂・刊行の動機になったようであり、さらに『孝義録』の刊行の成功に影響されて、諸藩においても孝子伝、良民伝といった類書が刊行されたのである。¹⁸⁾

藩で編纂され藩校で使用されたユニークな書として一例を挙げるならば、会津藩の『日新館童子訓』(享和3年, 1803脱稿)を挙げることができよう。本書は藩主・松平容頌(1744-1805)が自ら執筆編纂して藩校日新館(享和元年

開校)で使用(文化元年, 1804)された教科書である。会津藩士・永岡清治(生没年不詳)は、この『日新館童子訓』に関わって自著『旧夢会津白虎隊』において次のように述べている。

「平生日新館ニ学ヒ村上彦四郎義光カ芳野ノ戦死馬場美濃守信房カ長篠ノ戦死毛受勝助家顕カ賤嶽ノ戦死ノ如キハ先君容頌ノ藩翰ノ任ヲ重ンシテ自ラ撰ミ薫陶教化シ給ヒタル日新館童子訓ニ於テ習修シ其壮烈ナル忠肝義膽ヲ一日モ忘レス是等ノ忠臣義士ト数百年ノ後今日ニ於テ同一ノ運命ヲ共ニスルハ正ク先君容頌公ノ賜ニシテ白虎隊全体ノ覚悟ナレハ臣命ヲ致スノ最後ナリト心竊ニ念シ慷慨無言ニ咽ヒタリ」(大正15年, 非売品, 175頁)

戊辰戦争(1868-1869)の折、白虎隊の一員として戦いに加わった永岡清治が、まさに死ぬか生きるかの瀬戸際にあったときに思い出されたのが『日新館童子訓』の「忠臣義士」の話であったことを思うとき、「先人の伝記」型教材の教育的効果や感化力の大きさというものを考えざるを得ないのである。

では、この他に武家における「先人の伝記」的教材を使用した道徳教育には、どのようなものがあつたのだろうか。

その代表的なものに、浅見綱斎(1652-1715)が著した『靖献遺言』(全8巻, 貞享4年, 1687刊)を挙げることができよう。これは中国の「先人の伝記」集ともいふべき書である。つまり楚の屈平(屈原)、漢の諸葛亮(諸葛孔明)、晋の陶潜(陶淵明)、唐の顔真卿、宋の文天祥、謝枋得、處士劉因、明の方孝孺、以上8人の忠臣名臣の道義的言行を書き表し顕彰した書である。本来綱斎は日本の忠臣義士の言行録を著そうと考えていたが、幕府の発行禁止・迫害を回避するためにやむなく中国の忠臣・義士の言行録の形に替えたのであつた。¹⁹⁾

綱斎自身この書をテキストに講義を行い、それを筆録した『靖献遺言講義』(寛延元年, 1748刊)が遺されている。この中で、綱斎は「空言ヲ以テ義理ヲ説クハ、実ニ其事歴ヲアゲテ閱スルノ尤親切ニシテ、感發興起余アルニシカズ」と述べ、具体的な事例を挙げて道徳を説くことが親切な方法であり、感激感動を与えるのだとしている。綱斎はこのテキストを下敷きにして、日本史上の人物の道義的言行を取り上げその当否を論じている。

『靖献遺言』は綱齋門下の間で最も重視重用された書であったから、門下門流の学者たちが講義し、それを筆録したものが少なからず伝来している。²⁰⁾

同門（山崎闇齋学派）の谷秦山（1663-1718）は、『炳丹録』という『靖献遺言』と同じ忠臣孝子の「先人の伝記」書の執筆を予定していたが、『靖献遺言』が編纂されたことを知りこれを中止したといわれている。²¹⁾ 秦山は本書を高く評価して、その講義を門人に行うとともに、土佐藩において流罪で亡くなった同郷の野中兼山の遺族に同書を贈り、同書によって道義道徳を考究し実践躬行していくことを激励している。

橋本景岳（1834-1859）は「壮年に至り、『靖献遺言』を愛読し、外出の時多く之を懐にせり」とあるように外出時には『靖献遺言』を携帯することが多かったという。²²⁾ また、吉田松陰（1830-1859）は野山の獄にいたとき兄杉梅太郎宛の書簡（安政元年12月12日）に「靖献遺言どうぞ借覧は出来申す間敷くや。弟未だ此の書を読み申さず、已に夢の城中にも丁寧其の功を称し之あり、何卒一読仕りたし」²³⁾と書いて、『靖献遺言』の借覧を懇願している。

景岳や松陰をはじめとして幕末の志士の中にあって、『靖献遺言』を愛読した者は多い。小浜藩の尊攘論者・梅田雲浜（1815-1859）については、松陰によって「是れは靖献遺言にて固めたる男」²⁴⁾とまで評されていた。雲浜は強齋→小野鶴山（強齋の女婿、1701-1770）→山口風簷（鶴山の女婿、1741-1806）→山口菅山（風簷の子、1772-1854）というように綱齋の門下門流によって伝えられた『靖献遺言』による学問を継承していた。薩摩藩を代表する志士であった有馬正義（1825-1861）も山口菅山に師事しているが、その自伝に14歳の元服のときに友人とともに本書を読んだということが記されてある²⁵⁾。また、同書を愛読した越前藩主・松平慶永（1828-1890）は「読靖献遺言有作」と題する七言律詩を遺している。²⁶⁾

大阪の町人学者・山片蟠桃（1748-1821）も『靖献遺言』を読んで、以下のような賛辞を遺している。

「日本ノ書籍多シトイヘドモ、世教ニ渉ルハナシ。慶長以降武徳熾ニシテ、文家モ亦少トセズ。大徳数輩著ス処ノ書、スコブル孝弟仁義ヲ説クコト多シ。中ニモ栗山〔潜鋒〕先生ノ保元大記及浅見先生ノ靖献遺言コレガ

冠タリ。〔中略〕ア、浅見氏ノ骨髓コノ書ニアリ。コノ書ヲヨミテ涕を墜サル人ハ、ソノ人必不忠ナラン。又コノ書ヲ以テソノ浅見氏ノ人トナリヲ想像スベシ。コ、ニヲヒテカ予栗山・浅見二先生ノコノ二書ヲツネニ愛玩スルコト久シ。ユヘニ論コ、ニ及ブモノ也。我邦ノ述作ニヲヒテハ先コノ書ヲ以テ最トシ読ベシ。自カラ得ル処アラン」²⁷⁾

蟠桃は、栗山潜鋒(1671-1706)の『保建大記』(元禄2年、1689刊)と並べて『靖献遺言』をわが国の著作物の中でも冠絶した書であり、最も優先して読む書だと推奨しているのである。

『靖献遺言』が刊行されてから幕末にいたるまで、百数十年の歳月を閲しているが、その間本書は綱齋の門下門流の人々によって継承され講ぜられて、その中に説かれた道義道徳は明治維新に奔走した所謂志士と呼ばれた人たちの精神的バックボーンになったということは²⁸⁾、「先人の伝記」的教材が道徳教育上いかに大きな効力を有しているかということの一つの示唆を与えるものだと考えることができるだろう。

この『靖献遺言』とともに、多くの志士たちに読まれた書に頼山陽(1780-1832)著『日本外史』がある。²⁹⁾本書は文政12年(1827)に脱稿し、しばらく写本として流布し、天保7年(1836)8年ころに木活本として「拙修齋叢書」に収められて出版された。本書の内容については、尾藤正英が次のように述べている。

「本書はいわば人物中心の武家時代史であって、……個々の人物の人間像を描写し、その心情の美しさ、行動の正しさ勇ましさを顕彰することに主眼がおかれていて、直接に読者の心情にふれる要素が大きい。人々は読むことを通じて、武士としての生き方を、あるいは日本人としての人生観を、学ぶことができたのである」³⁰⁾

本書は尾藤が言うように源平から徳川までの武家時代史が人物中心にエピソードが描かれおり、「先人の伝記」的書物になっており、「日本人としての人生観を、学ぶことができた」。したがって本書は諸藩の藩校で教科書として、しばしば使用された。³¹⁾幕府の昌平黌で本書は教科書として採用されていないが、藩校では最多の採用数を誇っているのである。

「幕末から明治にかけて、『日本外史』ほど多くの読者をもった歴史書はな

かった」³²⁾といわれているが、それは版本の多様さでも窺うことができる。例えば木活本は少なくとも5種あり、川越版(川越藩学問所博諭堂蔵版)は14回改刻されている。また、頼氏正本(頼家で校正を加えた本)も4系列あって、各系列それぞれ一再ならず改刻されている。また、本書は武家に限らず、多くの寺子屋でも教科書として使用され、庶民にも親しまれていた伝記的歴史書であったのである。³³⁾

明治3年(1870)に来日したW・Eグリフィス(William Elliot Griffis, 1843-1928)は「若き明治皇帝の官軍は、彼らの国の物語の解説者たる頼山陽の著作をよく読み」と言っていたように³⁴⁾、明治維新後海外では、維新の原動力になった書として本書は注目を浴び、中国語、ロシア語、フランス語、英語に翻訳されたのである。³⁵⁾

3 近代以降(昭和前期まで)の「先人の伝記」型教材活用の実際

近代以降の修身教科書にみられる「先人の伝記」型教材活用の実際について以下、(1)「翻訳教科書」期～(4)「国定教科書」期の区分に分けて述べ、(5)では当時わが国の修身教育が国際的に注目を集めていたことや戦時期のアメリカの修身教科書の分析について触れておく。

(1)「翻訳教科書」期(明治5～12年)

日本の近代的学校教育制度は、明治5年(1872)8月に頒布された「学制」によってスタートする。そして、9月に文部省は小学教則を定めて初等普通教育の教授内容及び教科書を指示した。ここに示された教科書の多くは欧米文化を内容とした啓蒙書類で占められていた。したがって、明治初年(5～12年)は「翻訳教科書時代」とも呼ばれ、欧米の翻訳教科書や抄訳編修したものなどが多く使用されたが、当時「先人の伝記」を掲げた翻訳修身教科書としては『西国立志編』を挙げることができるであろう。

『西国立志編』はサミュエル・スマイルズ(Samuel Smiles, 1812-1904)の*Self-Help, with Illustration of Character and Conduct*(1859年刊)を中村正直(1832-1891)が明治3年(1870)に翻訳し、明治3～4年に刊行したものである。訳者の中村は、幕府時代当時昌平黌の主席教授で日本最高の漢学者と目さ

れていた人であるが、慶応2年（1866）幕府の英国留学生派遣に一行を代表する取締役として随行し英国に渡った。この留学は倒幕によって約一年半で中断され中村は帰国の緒に就くことになるが、その際親しくしていたフリーランド（Humphry W. Freeland, 1819-1892）から送別の品として贈呈してもらったのが、Self-Helpであった。中村は帰国の船中でこれを読み、そこに儒教道徳や修身訓話に相通するものを看取り感銘を受けた。そして、帰朝後直ちに翻訳に取りかかり、「西国立志編」と題して出版したのである。

『西国立志編』は立志、勤勉、忍耐、節約といった自助の精神を西洋古今の人物たちの伝記・エピソードを通して説いた書であるが、本書は小学校の上学年の口授教材、読物として使用されたようである。³⁶⁾ また、出版されるや本書は一般でも広く読まれ、明治天皇（1852-1912）も侍講から本書の講義を受けたほどであった。また、明治8年（1875）11月、中村が校長を務めた東京女子師範学校の開校式では美子皇后臨席の中、『西国立志編』の生徒による御前講読が行われている。

明治末年までに本書の出版部数は100万部に達し、「日本産業化の国民的教科書」ともなった。そして、この爆発的な売れ行きによって版元（明治10年刊行の『改正西国立志編』）の秀英舎は日本一の印刷所となった。福沢諭吉の『西洋事情』、内田正雄（1839-1876）の『輿地誌略』と並んで明治の三書と称される所以である。この書から感激感動した大倉組の創立者・大倉喜八郎（1837-1928）は、後年その感謝の意を表するために中村に白檀の火鉢を贈ったといわれているし、岡山孤児院の創設者・石井十次（1865-1914）も本書に感動し貧しい子供たちの教育を志したという。³⁷⁾

幸田露伴（1867-1947）は明治日本における中村の影響感化は福沢諭吉（1834-1901）を凌ぐものがあつたと昭和8年（1933）『明治初期文学界』で述べているが、露伴自身『西国立志編』に感化を受け触発されて『鉄三鍛』『蘆の一ふし』といった小説や『文明の庫』『蒸気船の発明者』『鉄の物語』などの発明発見物語を書いている。³⁸⁾ 雑誌『成功』（明治37年）の品性修養に必要な書物を問うたアンケートに、露伴は『論語』や『新約聖書』とともに『西国立志編』を挙げ、医学博士・土肥慶蔵（1866-1960）も『先哲叢談』と一緒に本

書を推奨している。また吉野作造（1878-1933）は『日本文学大辞典』（新潮社、昭和9年）の中で「福沢が明治の青年に智の世界を見せたと云ひ得るなら、敬宇〔中村正直〕は正に徳の世界を見せたものといっている」と書いたが、中村が教育勅語の草案執筆を文相・芳川顕正（1842-1920）から依頼されるほどに世の師表として仰がれていくようになったのも、この『西国立志編』の驚異的かつ衝撃的な力が与っていたものと考えられる。

さらに、本書の中のいくつかの話は、例えば種痘法を發明したジェンナーや陶祖パリシーのエピソードは、後の国定修身教科書をはじめとして国語教科書にも取り入れられたり着想を与えたりしていることから、その感化影響の大きさを物語っているといえる。³⁹⁾

これほど『西国立志編』が国民的に歓迎された背景には、同書が欧米の古今の「先人の伝記」を載せていたこと、そしてその「先人の伝記」型教材がわが国では江戸期から長きに亘って広範に編集され重用されてきたという歴史的素地が存在していたということなどが挙げられよう。

翻訳教科書の中で『西国立志編』以外に「先人の伝記」型教材として明治初年に普及したものに福沢諭吉が訳した『童蒙をしへ草』（全5冊、明治5年刊、Robert Chambers, *Moral Class Book*）などがある。同書にもベンジャミン・フランクリン、ニュートン、フレデリック大王などヨーロッパの古今の「先人の伝記」型教材が掲載されている。

明治初年には翻訳教科書が広く用いられた（明治5年9月に公布された「小学教則」には教師が教科書を使用して口授すべきことが記されている）が、邦人著作の「先人の伝記」型教材構成の教科書も、このとき出版されている。例えば『勲孝邇言』（全1冊、上羽勝衛著、明治6年刊）、『近世孝子伝』（全1冊、城井壽章著、同7年刊）、『挿画本朝列女伝』（全1冊、疋田尚昌著、同8年刊）などが、それである。⁴⁰⁾

(2) 「儒教主義的教科書」期（明治13～18年）

この後道德教育における「先人の伝記」型教材の受容・活用の傾向は、欧米偏重への反省と日本の伝統文化尊重の機運と相俟ってさらに高まっていく。それは明治12年（1879）道德教育の不徹底を痛感した明治天皇の聖旨を受けて

元田永孚（1818-1891）によって起草された「教学聖旨」の「小学条目二件」の中に「仁義忠孝ノ心ハ人皆之有リ。然トモ其幼少ノ始ニ其脳髓ニ感覺セシメテ培養スルニ非レハ他ノ物事已ニ耳ニ入り先入主トナル時ハ後奈何トモ為ス可カラス。当世小学校ニ絵図ノ設ケアルニ準シ古今ノ忠臣義士孝子節婦ノ画像・写真ヲ掲ケ幼年生入校ノ始ニ先ツ此画像を示シ其行事ノ概略ヲ説論シ忠孝ノ大義ヲ第一ニ脳髓ニ感覺セシメンコトヲ要ス」として打ち出されたことに端を発する。「仁義忠孝ノ心」つまり儒教的な道徳を具体的な「古今ノ忠臣義士孝子節婦」の「行事ノ概略ヲ説論」していくことが必要だとされたのである。

これを受けて文部省は明治13年(1880)に編集局を設けて、西村茂樹(1828-1902)を編集局長として刊行されたのが『小学修身訓』(全2冊)である。その内容は教学聖旨の趣旨を踏襲し、中国の古典、江戸期の教訓書、西洋の著書から抜粋された古今東西の格言や名句を8つの徳目の下に集めてあるものである。例話としての「先人の伝記」は掲載されていないが、それは「教師ノ口授ニ委託ス」と「凡例」に記されてある。以後この期に民間で刊行された修身教科書は、本書に準拠して編纂されるようになった。

この『小学修身訓』同様教学聖旨(小学条目二件第一項)の意を体し、明治天皇の親諭を受けて編纂された道徳教科書に『幼学綱要』(全7冊)がある。これは元田永孚が編集を担当し、明治15年(1882)宮内省から出版された。本書は「孝行」「忠節」をはじめとする20の徳目によって編成され、各章一つの徳目の大要が冒頭に記され、それに関する経書からの引用漢文がいくつか記されている。そして、その後その例話として和漢の歴史上の「先人の伝記」型教材が数話掲載されている。本書は勅旨をもって出版されたいわば勅撰に準ずる道徳教科書として先ず地方長官に頒賜され、その後全国の小学校に下賜されている。

本書に例話の主体として挙げられた「先人」は表1の通りである。()内は本書に示された徳目名である。なお、国定教科書(第1期～第5期)にも登場する人物名に傍線を施した。またその徳目、例話の内容が近似しているものは()部に傍線を施しておいた。

ここには全213名の人物が取り上げられており、古代52人(24.4%)、中世

33人(15.5%)、近世23人(10.8%)、近現代0人、外国105人(49.3%)という構成である。日本の「先人」と中国のそれがほぼ同じ割合で取り上げられていることがわかる。後に掲げる教科書は時代別でいうと近世の人物が最も高い割合で取り上げられているのに対して、本書はそれが古代であるところに特徴がある。また、外国の人物はすべて中国の人物が採用されているのは、儒教道徳を重視した元田の意図がそこに表れているといえよう。なお、後の国定教科書(第1～第5期)に登場する人物と同一であるのが20名(9.4%)、徳目・例話の内容が近似しているものが10名(4.7%)であるが、後述の表2から表6を見ると分かるように徳目を立てそれを具体的に説く「先人」の例話が使用されるという雛形は、この『幼学綱要』によって示されたと考えてよいだろう。

表1 『幼学綱要』(明治15年)の時代・国別登場人物(徳目)

時代 (国)	登場人物と徳目	登場 人数	割合 (%)
古代	神武天皇(孝行)、仁徳天皇(孝行)、丈部路祖父麻呂(孝行)、橘逸勢の女(孝行)、平重盛(孝行)、大伴部博麻(忠節)、和気清麻呂(忠節)、菅原道真(忠節)、雄略天皇・皇后(和順)、大仁上毛野形名・妻(和順)、顕宗天皇(弘計王)・仁賢天皇(億計王)(友愛)、和気清麻呂・和気広虫(友愛)、藤原忠平(信義)、橘岑継(勸学)、日本武尊(立志、剛勇)、後三条天皇(誠実、儉素)、藤原実頼(誠実)、野見宿禰(仁慈)、仁徳天皇(仁慈)、醍醐天皇(仁慈)、朱雀天皇(仁慈)、天智天皇(礼讓)、藤原良繩(礼讓)、藤原三守(礼讓)、源頼義(忍耐)、家原音那(貞操)、源渡の妻袈裟(貞操)、阪上当道(廉潔)、紀夏井(廉潔)、調伊企雛(剛勇)、藤原頼光(剛勇)、孝徳天皇(公平)、八兵衛(誠実)、成務天皇・武内宿禰(敏智、勉識)、高倉天皇(度量)、紀長谷雄(度量)、藤原保則(度量)、天智天皇(識断)、葛野皇子(識断)、藤原長方(識断)、崇神天皇(勉識)、道首名(勉識)、藤原在衡(勉識)。	52	24.4
中世	楠正成(忠節)、楠正行(忠節)、山内一豊・妻(和順)、豊臣秀吉・妻(和順)、高田信高・妻(和順)、北条泰時・北条朝時(友愛)、毛利元就(友愛)、武田信玄(信義)、源義家(勸学)、児島高德(立志)、山田長政(立志)、畠山重忠(誠実)、加藤嘉明(仁慈)、山之内治太夫・進士清三郎(礼讓)、三浦義村(礼讓)、松下禪尼(儉素)、青砥藤綱(儉素)、黒田孝高(儉素)、護良親王(忍耐)、静(貞操)、原駟旅舎の婢(貞操)、豊臣秀吉(敏智、度量)、村上義光(剛勇)、藤原隆資(公平)、北条時宗(識断)、脇屋義助(識断)、小早川隆景(識断)、北畠親房(勉識)。	33	15.5
近世	徳川家康(信義、誠実、敏智)、徳川秀忠(信義)、細井徳民(信義)、後光明天皇(勸学)、林羅山(勸学)、徳川光圀(勸学)、貝原益軒(勸学)、荻生徂徠(勸学)、塙保己一(勸学)、熊沢蕃山(立志)、新井白石(立志)、細川忠利(立志)、奥貫正卿(仁慈)、土井利勝(儉素)、上杉鷹山(儉素)、松平信綱(忍耐)、伊藤仁斎(忍耐)、安(貞操)、天野康景(廉潔)、甲賀孫兵衛(敏智)、本田忠勝(剛勇)、濱田弥兵衛(剛勇)、板倉勝重(公平)、酒井政親(度量)。	23	10.8

近現代	なし	0	0
外国	舜(孝行)、曹娥(孝行)、李密(孝行)、徐積(孝行)、楊震(孝行)、蘇武(忠節)、諸葛亮(忠節、公平)、顔杲卿(忠節)、岳飛(忠節)、文天祥(忠節)、宣王(和順)、太宗・后長孫氏(和順)、太祖・順聖皇后(和順)、王覽(友愛)、楊津(友愛)、玄宗(友愛)、王密(友愛)、鮑叔(信義)、范式(信義)、朱暉(信義)、荀巨伯(信義)、徐晦(信義)、范順仁(信義)、申顔(信義)、高宗(勤学、度量)、武公(勤学)、董仲舒(勤学)、匡衡(勤学)、車胤(勤学)、祖瑩(勤学)、黄履(勤学)、朱熹(勤学)、終軍(立志)、光武帝(立志)、劉備(立志)、范仲淹(立志)、程顥・程頤兄弟(立志)、郭子儀(誠実)、章仔鈞(誠実)、賈黯(誠実)、文王(仁慈、礼讓)、文帝(仁慈、儉素)、李士(仁慈)、辛公義(仁慈)、俞偉(仁慈)、曹彬(仁慈)、晋侯(礼讓)、靈公(礼讓)、藺相如(礼讓)、晏嬰(儉素)、張安世(儉素)、太祖(儉素)、張詠(儉素)、真宗の后郭氏(儉素)、太宗(儉素)、張良(忍耐)、韓信(忍耐)、張公藝(忍耐)、狄仁傑(忍耐)、白貞姫(貞操)、陳孝婦(貞操)、曹文叔の妻(貞操)、奉天竇氏の二女(貞操)、譚氏の婦趙(貞操)、闕文興の妻王氏(貞操)、禎亮の妻(貞操)、樂喜(廉潔)、孔伋(廉潔)、相田稷子(廉潔)、魯仲連(廉潔)、楊震(廉潔)、雷義(廉潔)、許衡(廉潔)、楚子(敏智)、蕭何(敏智)、鄧哀王冲(敏智)、司馬光(敏智)、李綱(敏智)、劉基(敏智)、樊噲(剛勇)、董宣(剛勇)、張綱(剛勇)、趙雲(剛勇)、段秀実(剛勇)、韓愈(剛勇)、方孝孺(剛勇)、王旦(公平)、周自強(公平)、舅犯(公平)、丙吉(度量)、裴度(度量)、王德用(度量)、文彦博(度量)、宋昌(識断)、王承元(識断)、寇準(識断)、韓琦(識断)、夏禹(勉識)、周公旦(勉識)、趙充国(勉識)、陶侃(勉識)、房玄齡(勉識)、陸龜蒙(勉識)、韓世忠(勉識)	105	49.3

明治14年(1881)5月に出された「小学校教則綱領」では、第10条に「初等科ニ於テハ主トシテ簡易ノ格言、事実等ニ就キ中等科及高等科ニ於テハ主トシテ稍高尚ノ格言、事実等ニ就テ兒童ノ徳性ヲ涵養スヘシ」と初めて修身の教材要旨が示された。「事実」とは修身実話、つまり本稿で言うところの「先人の伝記」である。

こうして、この教則に基づいて明治16年(1883)には『小学修身書』「初等之部」(全6冊)、翌17年(1884)には同「中等之部」(6冊)が、文部省編輯局から前記の『小学修身訓』を改めて編集して出された。したがって、「先人の伝記」は載せていないが、本書の冒頭「教師須知六則」の中で「書中何れの語を口授せんにも、かならず先づ其前に記したる小引の意をよく聞かせ、或は是に交ふるに、忠臣孝子の伝記を以てし、而して後其主とする所の語を挙げて、以てこれを断ずべし」とあって、教科書にある教訓に交えて教師が「忠臣孝子の伝記」を口授するという方針は『小学修身訓』と同様である。

民間においても、先の教則に従って多くの教科書が出版されている。その中で『小学修身書』（全3冊、金港堂、明治14年刊）は、多くの版を重ねた「先人の伝記」を使っている代表的な民間出版教科書である。本書は、例えば「孝弟師友」というように徳目を掲げ、その中に訓言や例話としての「先人の伝記」が配されている。

本書に挙げられた先人は表2の通りである。（ ）内の徳目名は、『国定教科書内容索引 尋常科修身・国語・唱歌篇』（国立教育研究所附属教育図書館編、広池学園出版部、平成8年）の「修身徳目索引」に拠り筆者がその内容から考えて記した。傍線部を施した趣旨は前表と同じ。

>

ここには全22名の人物が取り上げられており、古代1人（4.5%）、中世0人、近世8人（36.4%）、近現代0人、外国13人（59.1%）という構成である。外国人の例話の割合が最も多く、時代別では近世の割合が一番高い。外国人においては7割以上欧米人が占めているのが特徴である。後の国定教科書（第1～第5期）に登場する人物と同一であるのが4名（18.2%）、徳目・例話の内容が近似しているものが1名（4.5%）である。

表2 『小学修身書』（明治14年）の時代・国別登場人物（徳目）

時代 (国)	登場人物と徳目	登場 人数	割合 (%)
古代	<u>藤原行成</u> (礼儀・作法)	1	4.5
中世	なし	0	0
近世	<u>松平好房</u> (孝行・お手伝い), <u>文右衛門</u> (礼儀・作法), <u>具原益軒</u> (礼儀・作法, 迷信), <u>大椿</u> (勉学・立志), <u>清七</u> (孝行・お手伝い), <u>宅兵衛</u> (孝行・お手伝い), <u>亀松</u> (孝行・お手伝い), <u>安藤直次</u> (信義・友情)	8	36.4
近現代	なし	0	0
外国	<u>張子房</u> (礼儀・作法), <u>ソクラテス</u> (礼儀・作法), <u>ワシントン</u> (良心, 正直), <u>デモステン</u> (勉学・立志), <u>ヨング</u> (勉学・立志), <u>テモル</u> (克己), <u>アウドボン</u> (克己), <u>ハートリー</u> (親切・博愛・慈善), <u>ミシエル</u> (親切・博愛・慈善), <u>孫泰</u> (親切・博愛・慈善), <u>司馬温公</u> (勇氣), <u>リョーナルド</u> (正直), <u>ミカイル・アンジェロ</u> (勉学・立志)	13	59.1

(3) 「検定教科書」期 (明治 19～36 年)

明治 19 年 (1886) 小学教則が改正され、同 24 年 (1891) までは修身教育においては教科書を使用せず、教師の談話・口授によって行うものとされた。それは、暗誦や字義の解釈に偏るといった教科書使用の弊害が指摘されたことによるものであった。しかし、このとき出た同年 5 月の文部省令第 8 号 (「小学校ノ学科及其程度」第 10 条) には「小学校ニ於テハ内外古今人士ノ善良ノ言行ニ就キ児童ニ適切ニシテ且理会シ易キ簡易ナル事柄ヲ談話シ」とあるように、談話の中では「内外古今人士」つまり「先人」をとりあげて談話することが文部省の念頭にはあったようである。なお、同 19 年には、この年公布された教育令によって教科書の検定制度実施が明らかにされ、これに基づいて教科用図書検定条例が定められた。同 20 年にはこれを教科用検定規則と定めて、検定制度が実施運営される運びとなったが、修身教科書の民間における刊行は教科書不使用の影響を受けて激減していった。

そうした中で、談話資料として刊行され使用された教科書に丹所啓行・前川一郎著『普通小学修身談』(全 4 冊、集英堂、明治 19 年刊)がある。本書の凡例に「本書ハ小学尋常科ニ於テ修身ヲ教フルニ際シ内外古今人士ノ美德善行ニ就キ格言嘉言ニ適当シタルモノ、一例ヲ示シ以テ感化ノ効ヲ補ハントスルナリ」とあって、先の文部省令に則って著されたことがわかる。本書の特徴は「先人の伝記」を主体に編纂されている点である。本書に挙げられた和漢洋の先人つまり「内外古今人士」は表 3 の通りである。() 内、傍線部は前記と同じ。

ここには全 76 名の人物が取り上げられており、古代 6 人 (7.9%)、中世 8 人 (10.5%)、近世 27 人 (35.5%)、近現代 4 人 (5.3%)、外国 31 人 (40.8%) という構成である。時代別では近世の割合が最も高く、近現代の人物が取り上げられているのが特徴である。後の国定教科書に登場する人物と同一であるのが 6 名 (7.9%)、徳目・例話の内容が近似しているものが 3 名 (3.9%) である。

表3 『普通小学修身談』(明治19年)の時代・国別登場人物(徳目)

時代 (国)	登場人物と徳目	登場 人数	割合 (%)
古 代	藤原道長(勉学・立志)、藤原行成(自主)、矢田部黒麻呂(孝行)、赤染衛門(親子)、藤原在衡(勤労)、藤原公任(寛容)	6	7.9
中 世	原田左馬助・後藤孫兵衛(礼儀・作法)、毛利元就(勉学・立志)、森蘭丸(誠実)、北条泰時(兄弟)、青砥藤綱(正直)、源義経(勉学・立志)、塚原卜伝(沈着)	8	10.5
近 世	松平好房(孝行・お手伝い)、富(兄弟)、細井平洲(礼儀・作法、勉学・立志)、貝原益軒(公德・公共心)、文左衛門(規律)、岩次(克己)、蘆田七左衛門(孝行・お手伝い)、布袋屋與左衛門(孝行・お手伝い)、宗四郎兄弟(兄弟)、酒井金三郎(正直)、木下順庵(親切・博愛・慈善)、清七(孝行・お手伝い)、太郎八・萬亀兄妹(孝行・お手伝い)、伊藤仁斎(勉学・立志)、大椿(勉学・立志)、鈴木右衛門(親切・博愛・慈善)、林羅山(勉学・立志)、荻生徂徠(勉学・立志)、孫次郎(孝行・お手伝い)、河村瑞軒(信義・友情)、稲葉迂斎(信義・友情)、酒井忠勝(礼儀・作法)、安積澹白(敬虔)、本田正信(節度・節約・習慣)、甚助(孝行・お手伝い)、奥貫友山(親切・博愛・慈善)、小川泰山(勉学・立志)	27	35.5
近現代	藤岡喜一郎(兄弟)、井上量平の妻みせ(家庭)、中村栗園(良心)、池部汝玉(良心)	4	5.3
外 国	黄香(孝行・お手伝い)、苑式(信義・友情)、ワシントン(正直、信義・友情)、ジャック・シンプキン(良心)、ヤコブ(正直)、孟子母(勉学・立志)、リチャード・フワレイ(勉学・立志)、欧陽修(勉学・立志)、ツビ(親切・博愛・慈善)、ジョン(誠実)、ボルホルド(正直)、王祥(孝行・お手伝い)、司馬光(兄弟)、品蒙正(自主)、范純仁(信義・友情)、陸 (信義・友情)、魏昭(先生)、斐叔(兄弟)、祖瑩(勉学・立志)、クレルク(勉学・立志)、晏平仲(儉約・節約)、呂元膺(信義・友情)、鐘離瑾(親切・博愛・慈善)、邴原(勉学・立志)、ミカイル・アンジエロ(勉学・立志)、ワレル・ハスチングス(勉学・立志)、張堪(礼儀・作法)、パーレイ(良心)、楊震(誠実)、ロベール(親切・博愛・慈善)、張子載(誠実)	31	40.8

明治23年(1890)10月、教育勅語が煥発され、修身科は教育勅語の趣旨に基づいて行われることが「小学校教則大綱」(同24年11月)で示され、その内容については「修身ヲ授クルニハ近易ノ俚諺及嘉言善行等ヲ例証シ勸戒ヲ示シ教員自ラ児童ノ模範ト為リ児童ヲシテ浸潤薫染セシメンコトヲ要ス」とした。そして文部省の訓令第5号で従来の教師による口授形式が改められ、教科書の使用が発令された。そして同24年12月「小学校修身教科書検定標準」を公布した。その検定標準の中に「修身教科用図書ニ掲載セル例話ハ成ルヘク本邦人ノ事蹟ニシテ勸善的ノモノタルヘシ」とあり、「先人の伝記」などの「例

話」はなるべく日本人の「事蹟」で「勸善的」なものを選ぶようにとしている。

以上のように教科書の使用とその基準が示されたことによって、同 25 年 (1892) から 27 年 (1894) にかけて約 80 種の小学校修身書が出版されるようになったのである。⁴¹⁾

『小学修身訓』(上中下 3 冊, 末松謙澄著, 精華舎, 明治 25 年 1892 刊) は、この教育勅語の趣旨と文部省の教則によって編集された教科書である。本書は毎巻 40 課が置かれ、徳目によって課が編成され訓言と事例つまり「先人の伝記」が載せられている。こういう徳目本位に編集・教材配列がなされるの(徳目主義の教科書といわれるもの)は、明治 30 年代の初めごろまでである。その徳目は、教育勅語に示された徳目か小学校教則大綱に掲げられた徳目に基づいている。⁴²⁾

本書に挙げられる先人を列挙すると表 4 の通りである。() 内、傍線部は前記と同じ。

ここには全 45 名の人物が取り上げられており、古代 4 人 (8.9%), 中世 19 人 (42.2%), 近世 22 人 (48.9%), 近現代 0 人, 外国 0 人という構成である。後の国定教科書に登場する人物と同一であるのが 15 名 (33.3%) である。時代別でみると中世、近世がほぼ同じ割合で、両者でほぼ占められているのが特徴である。徳目・例話の内容が近似しているものが 10 名 (22.2%) である。外国人が取り上げられていないのは、検定標準に「例話ハ成ルヘク本邦人ノ事蹟ニシテ」とあったことが影響しているのであろう。

表 4 『小学修身訓』(明治 25 年)の時代・国別登場人物(徳目)

時代 (国)	登場人物と徳目	登場 人数	割合 (%)
古 代	藤原忠平(信義・友情)、藤原行成(寛容)、源義家(勉学・立志)、崇賢門院(親切・博愛・慈善)	4	8.9
中 世	森蘭丸(正直)、蒲生氏郷(正直、規律)、楠木正行(孝行・お手伝い)、楠木正行の母(孝行・お手伝い)、丹羽長重(信義・友情)、毛利元就(協同)、前田利家(兄弟)、荒木村重(信義・友情)、山中鹿之助(信義・友情)、村上義光(忠義)、北条時宗(忠義)、源実朝(忠義)、北条泰時(兄弟)、加藤清正(友情・信義)、山本勘助(人格の尊重)、松下禪尼(儉約・節約)、山内一豊の妻(家庭)、楠木正成(忠義)、瀧川一益(勇氣)	19	42.2

近世	渡邊子観(孝行・お手伝い), 鬼東忠兵衛(正直), 三宅弥平治(礼儀・作法), 徳川光圀(親切・博愛・慈善), 伊能忠敬(公益), 仲根東里(孝行・お手伝い), 福依實(孝行・お手伝い), 徳川家康(礼儀・作法), 上杉鷹山(親切・博愛・慈善), 貝原益軒(敬虔), 野中兼山(勉学・立志), 徳川吉宗(勇気), 徳川家綱(礼儀・作法), 若林新七(先生), 新井白石(友情・信義), 蒲刈島新之助(孝行・お手伝い), 廣瀬組かめ(孝行・お手伝い), 弥兵衛(尊敬・感謝), 池田光政(正義), 熊沢蕃山(勉学・立志), 中村楊斎(沈着), 綾部道弘(儉約・節約)	22	48.9
近現代	なし	0	0
外国	なし	0	0

次に『新編 修身教典』(尋常小学校用全4冊・高等小学校用全4冊, 普及舎, 明治33年1900刊)を見てみよう。本書は明治33年に改正された小学校令及び施行規則によって編纂された教科書である。本書の緒言に「本書ハ、徒ニ、多クノ人ノ事例ヲ示シテ児童ヲ困惑セシムルコトヲ避ケ性格ノ完美ニシテ、国民ノ模範タルベキ人物ヲ挙ゲ、興味アル具体的事例ニヨリテ、道德的感情及道德的意志ヲ修養センコトヲ期セリ」としてあるように、国民の模範となるべき人物が厳選されその伝記に、いくつかの課(徳目)をあてて授業ができるようにしてある。こういう人物本位に編集・教材配列がなされるものを、「人物伝記主義の教科書」と称している。

本書に挙げられた人物は、表5の通りである。()内、傍線部は前記と同じ。

ここには全29名の人物が取り上げられており、古代6人(20.7%), 中世8人(27.6%), 近世14人(48.3%), 近現代1人(3.4%), 外国0人という構成である。時代別で見ると近世の人物が約半数を占めているのが特徴である。後の国定教科書に登場する人物と同一であるのが15名(51.7%)である。徳目・例話の内容が近似しているものが10名(34.5%)である。表1から表4の教科書と比較してみると、国定教科書の取り上げる人物と近似する徳目・例話の割合が、より一層高くなっていることが看取できる。

表5 『新編 修身教典』（明治33年）の時代・国別登場人物（徳目）

時代 (国)	登場人物と徳目	登場 人数	割合 (%)
古 代	神武天皇(皇室), 和気清麻呂及其の姉(忠義), 菅原道真(勉学・立志, 寛容), 仁徳天皇(皇室), 紫式部(家庭), 天智天皇(皇室),	6	20.7
中 世	毛利元就(兄弟), 蒲生氏郷(規律), 森蘭丸(正直), 楠木正成(忠義), 楠木正行(忠義, 孝行), 豊臣秀吉(勉学・立志, 勤労, 進取気象, 友情, 誠実, 忠義), 加藤清正(勇氣, 忠義, 親切・博愛・慈善), 中江藤樹(敬虔, 勉学・立志, 孝行, 親切・博愛・慈善, 家庭, 勇氣, 公益, 規律, 尊敬・感謝),	8	27.6
近 世	二宮尊徳(勉学・立志, 忍耐, 孝行, 兄弟, 親切・博愛・慈善, 儉約・節約, 誠実, 公益, 良心, 勇氣), 熊沢蕃山(忍耐, 克己), 貝原益軒(勉学・立志, 敬虔, 公益), 渡邊崋山(忍耐, 克己, 兄弟, 勉学・立志, 孝行, 尊敬・感謝), 伊藤仁斎(勉学・立志, 孝行, 寛容), 伊藤仁斎の夫人(家庭), 松平定信(勉学・立志, 克己, 親切・博愛・慈善, 忠義), 細井平洲(勉学・立志, 誠実, 寛容, 先生, 親切・博愛・慈善), 中江藤樹の婦人(家庭), 鈴木今右衛門夫婦(家庭), 河瀬はる(家庭), 瀧鶴臺の夫人(敬虔), 名取彦兵衛(発明・工夫, 公益), 塩原多助(発明・工夫, 自立・自営, 正直), 小川泰山(克己)	14	48.3
近現代	税所敦子(勉学・立志, 家庭, 忠義)	1	3.4
外 国	なし	0	0

(4) 「国定教科書」期（明治37～昭和20年）

以上(1)「翻訳教科書」期から(3)「検定教科書」期の修身教科書を概観してきたが、どの期の教科書においても「先人の伝記」型教材を活用している教科書が出ていたことや次第に国定教科書の取り上げる人物と近似する徳目・例話の割合が高くなってきていることがわかる。

特に明治20年代はヘルバルト派(Herbartsschule)の教育理論・教授法が盛行し、その影響によって「先人の伝記」は積極的に取り入れられるようになった。ヘルバルト派の一人リンドネル(Lindner, Gustv Adolf, 1828-1887)の著書が『倫氏教育学』（金港堂書籍）として湯原元一訳で明治26年(1893)に刊行されているが、それには次のような「先人の伝記」活用の効用・効果が述べられている。

「示例の影響は教諭の勢力より遥かに強大なり。何となれば言語は、直ちに模すべからざるも、示例は容易に之を学ぶべきを以てなり。且示例は、生徒に教ふるに、独り其事をなすべきを以てせずして、併せて如何にすれば、其事は実行せられ得べしやを以てすればなり。今示例を分ちて左の三

者となす。 / (中略) 三は歴史上及び理想上の示例なり。古人の言行を授けて、其言行を以て、生徒意志行為の標準となすは是歴史上の示例なり。又其事実に関せず、善悪の人物を仮定して、同じく是を以て、生徒の意志行為を導かんとするは、是理想上の示例なり。此目的に供用すべきは、東西聖賢の伝記の外、詩歌、小説、伝奇等、其種類極めて多し」(211頁)

ヘルバルト派は道德教育を重視した。そして、このリンドネルが言うように「東西聖賢の伝記」の教育的効果がヘルバルト派では高く評価されていたので、徳育充実化を進めていた当時のわが国の教育界にとっては大いに歓迎されるべき教育理論であった。また、道德教育における「先人の伝記」活用は、これまで概観してきたようにすでに近世から重用されてきたから、わが国の伝統的道德教育法に適った教育方法であったともいえる。

したがって、文部大臣・森有礼(1847-1889)はドイツからハウスクネヒト(Hausknecht, Emil, 1853-1927)を招聘し、明治21年(1888)、東京帝国大学でヘルバルト派の教育学を講義させ、さらにドイツ留学帰朝の教育学者にも継続してそれを教えさせた。そして、ここで学んだ門下生たちが新設の高等中学や高等師範学校で教え、ヘルバルト派の教育学を広めていったのである。

このヘルバルト派の修身教科書への影響については、第1期、第2期の修身教科書編纂委員を務めた吉田熊次(1874-1964)が以下のように述べている。

「教材の配列に関してはヘルバルト派の所謂人物伝記主義と称する所の、同一人物の伝記に依りて多くの徳目を結局することが流行して居た。民間の或修身書の如きは一学年を通じて二三人の伝記を授け、其の中に数十の徳目を配当するのである。其の結果として牽強付会の説明が多く徳目の主義を明らかにすることを不可能ならしめた。国定教科書にては斯かる欠点を避けつゝ、人物基本主義の長所を失はざらしめんが為に、同一人物に数個の徳目を配当することを原則とした」⁴³⁾

吉田が言うように、国定教科書は人物基本主義の長所を失わないように、また徳目基本主義の得失も考え、両者の長所を合わせとることをつとめて編集された。第1期から第5期にかけての国定教科書には、その時期それぞれの国内事情や国際環境に影響されて各期ともに取り上げる人物や内容、徳目などに変

化や特徴を見出すことができるが、全期間を通して「先人の伝記」を基本に据えて活用する人物伝記主義を取っていることには変わりはない。

第1～5期の国定教科書に挙げられた人物（例話の中で徳行の主体になっていない人物名は取りあげていない）は、表6の通りである。

第1期から第5期までに全161名の人物が取り上げられており、古代14人（8.7%）、中世15人（9.3%）、近世71人（44.1%）、近現代48人（29.8%）、外国13人（8.1%）という構成である。時代別で見ると近世の人物が44.1%と最も高い割合を示している。国定教科書以前の教科書と比較して特徴的なのは、近現代の人物が多く採用されていることである。その傾向は、第1期3人→第2期11人→第3期15人→第4期19人→第5期27人というように改訂されるごとに採用人数が増えている。一方外国人は孔子と藺相如を除いてすべて欧米人である。第1期10人、第2期5人、第3期5人、第4期6人、第5期1人というように、第1期の10人が最も多く、戦時色の影響を受けた第5期の1人（ジェンナー）が最も少ない。

表6 国定修身教科書（第1～5期）の時代・国別登場人物（徳目・登場教科書）

時代 (国)	登場人物・徳目・登場教科書（I～V期）	登場 人数	割合 (%)
古 代	天照大神(国体IⅢIVV)、瓊瓊杵尊(国体ⅢV)、大伴家持(祖先と親類IVV)、小野道風(勉学・立志V)、上毛形名と妻(祖先と親類Ⅱ)、神武天皇(皇室IⅡⅢIVV)、菅原道真の母(祖先と親類IVV)、天智天皇(規律V)、藤原行成(寛容Ⅱ)、源義家(勉学・立志IⅡ)、小子部のすがる(忠義V)、日本武尊(沈着、忍耐I)、和氣清麻呂(忠義Ⅱ)、和氣広虫(親切・博愛・慈善Ⅱ)	14	8.7
中 世	織田信長(皇室、勉学・立志ⅡⅢIV)、加藤清正(友情・信義、勇気、正義、誠実、沈着ⅡⅢIV)、北畠親房(国体V)、吉川元春(協同ⅢIV)、木村重成(克己、勇気ⅡⅢIV)、楠木正成(皇室、忠義IⅡⅢIVV)、楠木正行(孝行、忠義IⅡⅢIV)、高台院(豊臣秀吉の妻)(尊敬・感謝ⅡⅢIV)、小早川隆景(協同ⅢIV)、豊臣秀吉(忠義、勉学・立志、尊敬・感謝、勤労、誠実、沈着ⅡⅢIV)、河野通有(忠義IⅡIV)、井芹秀重(忠義IV)、毛利元就(協同ⅢIV)、毛利吉就の妻(沈着ⅡⅢ)、山田長政(進取気象V)	15	9.3
近 世	新井白石(勉学・立志、信義・友情)、泉八右衛門(兄弟)、伊藤冠峰(信義・友情I)、伊藤東涯(人格尊重ⅡⅢIV)、伊能忠敬(勤労、先生、迷信ⅡⅢ)、稲生ハル(祖先と親類ⅡⅢIV)、井上でん(発明・工夫ⅡⅢIVV)、猪山作之丞(協同ⅢIV)、上杉鷹山(儉約・節約、孝行、勉学・立志、発明・工夫、先生ⅡⅢIV)、上杉重定(孝行Ⅱ)、沖楨介(忠義V)、貝原益軒(寛容、衛生・健康、敬虔ⅡⅢIV)、春日局(規則遵法ⅡⅢ)、勝安芳(進取気象、勉学・立志、	71	44.1

近世	<p>勇氣ⅢⅣⅤ), 賀茂真淵(勉学・立志Ⅴ), 鹿持雅澄(勉学・立志Ⅴ), 栗林次兵衛(協同ⅢⅣ), 儀兵衛(孝行ⅢⅣ), 久坂玄瑞(敬虔, 勉学・立志ⅠⅡⅤ), 後光明天皇(克己, 勇氣ⅠⅡ), 小島蕉園(誠実Ⅱ), 西郷隆盛(寛容ⅢⅣⅤ), 作兵衛(勤勞ⅢⅣⅤ), 佐久良東雄(皇室Ⅴ), 佐太郎(公益ⅠⅢⅣ), 重富平左衛門(協同ⅢⅣ), 杉梅太郎(兄弟, 親子ⅣⅤ), 杉滝子(家庭ⅢⅣ), 鈴木今右衛門(親切・博愛・慈善ⅡⅢⅣ), 高杉晋作(敬虔ⅠⅡⅤ), 高田善右衛門(勤勞, 自立自営ⅠⅡⅢⅣ), 高田屋嘉兵衛(進取気象, 勇氣ⅡⅢⅣⅤ), 滝鶴台の妻(節度・節制習慣ⅡⅢⅣ), 田中久重(発明・工夫Ⅳ・Ⅴ), 田辺晋斎(人格の尊重Ⅰ), つな(奉仕ⅡⅢ), 徳川家康(忍耐, 誠実, 祖先と親類, 勇氣ⅠⅡⅢⅣ), 徳川光圀(儉約・節約, 忠義ⅠⅡⅢⅣ), 徳川吉宗(祖先と親類Ⅰ), 虎吉(親切・博愛・慈善ⅠⅡⅢ), 中江藤樹(尊敬・感謝, 人格の尊重ⅡⅢⅣⅤ), 永田佐吉(尊敬・感謝ⅢⅣ), 南宮大湫(信義・友情Ⅰ), 二宮尊徳(親子, 孝行・お手伝い, 勉学・立志, 兄弟, 勤勞, 自立自営, 祖先と親類ⅠⅡⅢⅣⅤ), 野村望東尼(忠義Ⅴ), 橋本佐内(寛容ⅢⅣ), 林子平(良心ⅡⅢ), 伴信友(衛生・健康ⅡⅢⅣ), 福井仙吉(信義・友情Ⅳ), ふさ(孝行・お手伝いⅠⅡⅢⅣ), 布田保之助(公益ⅣⅤ), 藤井懶斎(迷信Ⅰ), 高橋源六郎(公益Ⅲ), 細井平州(儉約・節約, 尊敬・感謝, 先生, 信義・友情, 礼儀・作法ⅡⅢⅣⅤ), 孫兵衛(動植物の愛護ⅡⅢⅣ), 松平定信(規則遵法, 節度・節制・習慣ⅠⅡⅣ), 松平信綱(正直ⅢⅣ), 松平好房(礼儀・作法ⅡⅢⅣ), 円山応挙(勤勞ⅢⅣⅤ), 三宅尚斎の妻(家庭Ⅱ), 高崎正風(克己ⅢⅣ), 鐵眼(勉学・立志, 親切・博愛・慈善), 飛田与七(信義・友情Ⅳ), 間宮林蔵(進取気象Ⅴ), 前野良沢(忍耐Ⅰ), 本居宣長(整理・整頓, 勉学・立志ⅢⅣⅤ), 本松平右衛門(協同ⅢⅣ), 弥兵衛(尊敬・感謝ⅠⅡ), 山下助左衛門(協同ⅢⅣⅤ), 吉田松陰(兄弟, 敬虔, 自信, 先生, 親子, 勉学・立志ⅡⅢⅣⅤ), 渡辺華山(兄弟, 規律, 孝行, 勉学・立志ⅡⅢⅣ), 岩谷九十老(正義Ⅴ), 角倉了以(公益Ⅰ)</p>	71	44.1
近現代	<p>飯沼正明(進取気象Ⅴ), 石井十次(親切・博愛・慈善Ⅲ), 板垣退助(克己Ⅴ), 伊藤小左衛門(兄弟, 進取気性ⅡⅢⅣ), 稲垣清二(忠義Ⅴ), 岩佐直治(忠義Ⅴ), 上田定(忠義Ⅴ), 瓜生岩(親切・博愛・慈善, ⅣⅤ), 太田恭三郎(進取気象Ⅴ), 大山巖(克己Ⅴ), 片山義雄(忠義Ⅴ), 加藤建夫(忠義Ⅴ), 上村彦之丞(親切・博愛・慈善ⅡⅢⅣ), 木口小平(忠義, 勇氣ⅠⅡⅢⅣ), 栗田定之丞(公益ⅡⅢⅣ), 向後三四郎(忠義Ⅳ), 皇后(美子)陛下(皇室ⅠⅡ), 皇后(節子)陛下(皇室ⅡⅢ), 皇后(良子)陛下(皇室ⅣⅤ), 皇太后(美子)陛下(皇室Ⅳ), 皇太后(節子)陛下(皇室Ⅴ), 皇太子(明仁)殿下(皇室ⅣⅤ), 皇太子(裕仁)殿下(皇室Ⅲ), 後藤新平(克己Ⅴ), 小林環(忠義Ⅳ), 向後三四郎(忠義Ⅳ)佐久間勉(責任ⅡⅢⅣⅤ), 佐々木直吉(忠義Ⅴ), 渋沢栄一(勤勞, 自立自営Ⅳ), 杉野孫七(忠義ⅢⅣ), 橘周太(忠義Ⅴ), 谷村計介(忠義ⅠⅡⅢ), 大正天皇(皇室, 祝日・大祭日Ⅲ), 乃木希典(公德・公共心, 誠実ⅢⅣⅤ), 野口英世(勉学・立志ⅣⅤ), 広尾彰(忠義Ⅴ), 廣瀬武夫(忠義, 約束ⅡⅢⅣ), 古野繁美(忠義Ⅴ), 古橋源六郎(公益Ⅲ), 明治天皇(皇室, 祝日・大祭日ⅡⅢⅣⅤ), 北白川宮能久親王(皇室Ⅱ), 久田佐助(責任Ⅴ), 昭和天皇(皇室, 祝日・大祭日ⅣⅤ), 山本五十六(忠義Ⅴ), 横河省三(忠義Ⅴ), 横山薫範(忠義Ⅴ), 横山正治(忠義Ⅴ), 宮古島の人々(親切・博愛・慈善Ⅳ)</p>	48	29.8
外国	<p>インス(自立自営Ⅰ), タゲッソー(規律Ⅰ), 孔子(節度・節制・習慣Ⅳ), コロンブス(忍耐, 自信ⅡⅢⅣ), ジェンナー(発明・工夫ⅠⅡⅢⅣⅤ), ソクラテス(規則遵法, 勇氣ⅠⅢⅣ), ナイチンゲール(動植物の愛護, 親切・博愛・慈善ⅡⅢⅣⅤ), ニュートン(勤勞Ⅰ), ネピアー(約束Ⅰ), ネルソン(忍耐Ⅰ), フランクリン(規律, 公益, 自立自営ⅡⅢ), リンカーン(勉学・立志, 正直, 親切・博愛・慈善, 人格の尊重ⅣⅤ), 蘭相如(寛容Ⅰ), ワシントン(正直ⅠⅡ)</p>	13	8.1

さて、こうした「先人の伝記」型教材を主体とした教科書について、当時の教育界ではどのような評価がなされていたのだろうか。広島高等師範訓導であった堀之内恒夫は昭和9年（1934）に刊行した自著『修身教育の根本的省察』（賢文館）において、次のように述べている。

「修身教育は実に困難であるとされてをる。恐らく修身教育が易々たるものであるといふ教育者は天下二十幾万の教育者中一人としてあるまい。修身教育困難の声は殆ど堪へ間なく聞く所である。困難所かそれは更に極論されて修身教育の効果にさへ疑問を挿む者すら少なくない。実際修身教育の効果をあげるといふことは難事中の難事」（307～308頁）

堀之内は、このように率直に修身教育の難しさやその教育的効果をあげることの困難性に言及しながらも、「例話教材などといふは修身科の教材としては、極めて重要な教材である」（305頁）というように、例話教材すなわち「先人の伝記」型教材の重要性を指摘しているのである。

堀之内が説いた例話教材の重要性とその価値については、彼の『修身教育原論』（東洋図書、昭和4年、74～110頁）に詳しい。彼はその中で例話教材の「陶冶価値を否定した人はないと思ふ。特に小学校に於ける修身教育に於ては、例話教材の価値は多分に信ぜられてゐることは、こゝに私の贅言を要せない所であらう」（74頁）と書いているが、当時例話教材に対する教育的効用は広く認められていたことがわかる。

（5）修身教育の国際的評価

「先人の伝記」型教材を主体とした教科書を使用した修身教育の教育的効用について、最後に、海外からの評価という観点から推察しておきたい。

わが国の修身教育は、明治後期において国際的な注目を浴びている。それを主に平田論治の『教育勅語国際関係史』（風間書房、平成9年、522頁）に拠って以下紹介してみたい。

前記「検定教科書」期の修身教科書の事例として取り上げた『小学修身訓』（明治25年刊）の著者・末松謙澄（1855-1920）は渡英して、1905年（明治38）2月イギリスの有力総合誌『ナインティーンズ・センチュリー・アンド・アフター』において「日本の道徳教育」（*Moral Teaching in Japan*）という論

説を発表している。その翌3月には末松はロンドン芸術協会 (Society of Arts) の第13回例会で「日本の倫理」(The Ethics of Japan) と題する演説を行い、それについて例会の議長を務めていたフリーマン・ミットフォード (Algernon.B.Freeman-Mitford, 1837-1916) は、後日 (1906年2月) 来日して末松との再会を果たし、その日本滞在記の中で、次のような賛辞を書き記している。

「彼〔末松〕がタイムズ紙、その他の英国やフランスの新聞雑誌載せた講演記録や小論文によって、彼の名前はヨーロッパ中で有名になっていた。この前彼と会ったのは、私が、その時、議長を務めたロンドンの芸術協会で、日本の道徳に関する素晴らしい論文を彼が読み上げたときであった」⁴⁴⁾

末松とミットフォードが再会を果たした翌1907年 (明治40)、ロンドン大学の日本教育講演の要請を受けて菊池大麓 (1855-1917) が5カ月間にわたる講演を行い、その講義録である『日本の教育』(*Japanese Education, Lectures Delivered in the University of London*) が1909年 (明治42) 5月にロンドンのジョン・マレー社から英文で出版された。これはイギリスにおいて大きな反響を呼び、数多くの新聞雑誌が本書を取り上げて論評した。この論評の邦訳が菊池の著書『新日本』(富山房, 明治43年, 134頁) に収録されている。収録 (17~134頁) されている論評誌は、以下の27誌である。

『ウエストミンスター・ガゼット』(1909年5月29日), 『タイムス』(1909年6月3日), 『モーニング・ポスト』(1909年6月4日), 『イーヴニング・スタンダード』(1909年6月5日), 『オブザーヴァー』(1909年6月13日), 『グローブ』(1909年6月16日), 『デイリー・クロニクル』(1909年6月22日), 『デイリー・ニュース』(1909年6月23日), 『エデュケーション・タイムス』(1909年7月1日), 『サタデー・ウエストミンスター・ガゼット』(1909年7月10日), 『デイリー・テリグラフ』(1909年7月21日), 『アイリッシュ・タイムス』(1909年7月23日), 『ニューカッスル・クロニクル』(1909年7月23日), 『リバプール・ポスト』(1909年7月28日), 『スクールマスター』(1909年8月2日, 1909

年 8 月 14 日), 『マンチェスター・ガーデアン』(1909 年 8 月 6 日), 『サタデー・レビュー』(1909 年 8 月 7 日), 『パブリッシャーズ・サーキュラー』(1909 年 8 月 14 日), 『ジャパン・デーリー・ヘラルド』(1909 年 8 月 11 日), 『ジャパン・デーリー・メール』(1909 年 8 月 19 日), 『エデュケーション』(1909 年 8 月 20 日), 『ウォー・オフィス・タイムス』(1909 年 8 月), 『リテラリー・ガイド』(1909 年 8 月), 『リバプール・クーリヤー』(1909 年 9 月 3 日), 『ガーデアン』(1909 年 9 月 8 日), 『ペルメル・ガゼット』(1909 年 11 月 1 日), 『スペクテーター』(1909 年 11 月 20 日).

この中の『サタデー、レビュー』には「此の書の最も興味あるは日本小学教育の記述と道徳教育に使用せらるゝ方法との記述に存す」(86 頁)などと書かれているが、これら新聞雑誌の数から見ても、この書がいかにイギリスにおいて注目を浴びていたかが推察できるであろう。

1908 年(明治 41), 第 1 回国際道徳教育会議(First International Moral Education Congress)が国際倫理協会連合(International Union of Ethical Societis)主催によってロンドン大学で開催された。世界初の道徳教育の国際会議である。21 カ国の政府及び 22 の大学, 52 の教育当局, 118 の各種団体, 計 192 に上る政府・団体, 1800 人が参加し, 4 日間にわたって盛大に挙行された。これに日本からは北条時敬(広島高等師範学校長)が出席し, 「日本諸学校の徳育」(*An Address on Morals as Taught in Japanese Schools*)と題する演説を行っている。会場には教育勅語や修身教科書などが陳列され, 各国代表からこれを買いたいという希望が殺到し, 「大に喝采を博せり」と後に北条は『東京朝日新聞』(「万国道徳会議」1909 年 6 月 13 日)に書いている。

修身は終戦直後, 占領軍によって停止され紆余曲折をへて道徳教育は社会科に吸収される形で姿を消していったが, 戦時期にアメリカ側では修身教科書の緻密な調査が行われていた。それはカリフォルニア州モンテレーのプレシディオにある CASA(民政要員集合基地)で Lockard と Ehret の二人によって進められ, 彼らは修身教科書の内容について「占領軍の安全と成功を脅かすものではなく」, 「社会や国家に関する説話」も「アメリカの小学校の教材と大差はない」とし, 戦時色の強い昭和 15 年版の教科書についてもそれは「一時的

なもので、修身教科書の基本原理』であるとは分析していなかった。そして、占領直後に行った CIE（民間情報教育局）の厳密な調査分析の結果においても「大部分は無害」であったが、「修身科を禁止する強い圧力があり」「みせしめ」のために停止指令が出されたのであった。⁴⁵⁾

日本は戦前台湾を統治し、台湾の人たちは日本の教育を受けていた。その日本統治時代の学校教育を振り返って、台湾人実業家の蔡焜燦（1927-）はそれを高く評価し、特に修身教育については、次のような発言を行っている。

「台湾で販売部数ナンバー・ワンを誇る新聞社『自由時報』の董事長（会長）・呉阿民氏は私の親友の一人であるが、彼は自分のオフィスに当時の文部省発行・児童用『尋常小学修身書』を秘蔵している。彼もまた日本統治時代の教育を評価する者として人後に落ちない。（中略）日本の道德教育こそが台湾人の精神基盤となつて、その後の台湾発展に大きく貢献したというのが歴史の眞の姿なのである。（中略）台湾人がもっとも尊ぶ日本統治時代の遺産は、ダムや鉄道など物質的なものではなく、『公』を顧みる道德教育など精神的遺産なのである」⁴⁶⁾

修身教科書を成人後も座右の所として自分のオフィスに置いているというこの記述は、修身教科書がその人の人格形成に関与したことの大きさを物語るものとして、興味深い一事例を提供しているととらえることができるだろう。

4 ま と め

『靖献遺言』が世に出たのが 1687 年、それから約 90～100 年後に庶民の子供が学ぶ『本朝千字文』（1775 年）『菅丞相往来』（1793 年）などが刊行されている。そして 1830 年代に出た『日本外史』は藩校や寺子屋でもよく使用されたということは、上述したとおりである。

明治の初期には『西国立志編』が学校で使用される一方、一般でもベストセラーになるほどによくよまれ、文化人や実業家たちに多大な影響を与えた。その後は、「日本の道德」を教えることに主眼をおいた『幼学綱要』が編纂され、これが祖形となつて国定修身教科書がつくられていったのである。

したがって本稿では『靖献遺言』の 1687 年から国定修身教科書が使用され

た1945年までの約250年間を概観したわけだが、この間「先人の伝記」型教材は道徳教育において積極的に取り入れられ活用され、明治維新に活動した人々の精神的支柱の一翼を担い、近代国民国家形成期においては国民道徳形成の主体をなしていたといつてよい。したがって、その教育的効用は大いに評価されてしかるべきものと考えられるのである。

そうであるからこそ、堀之内恒夫が言っていたように「先人の伝記」型教材の価値は当時十分に尊重されていたし、修身教育は国際的に大いに注目を集め、占領軍はその影響の大きさを恐れて修身停止の指令を出したのであったが、彼らのその内容分析は「大部分は無害」というものであったのである。

5 おわりに

筆者は既に「先人の伝記」型教材を中心に書き上げた『道徳の教科書—善く生きるための八十の話』（PHP研究所、平成15年、301頁）と、それを教材にした道徳の時間の授業記録『道徳の教科書・実践編—「善く生きる」ことの大切さをどう教えるか』（同上、平成19年、249頁）を刊行しているが、前者の著書を書いていくときに参考にしたものが国定修身教科書であった。

戦後、国定修身教科書は軍国主義・超国家主義的教材を提供したということでは低い評価を受けてきたが、実際にそれを読み自己の教材の参考資料とした者からそうした批判や低い評価は言われなき部分を多分に含んでいると考えざるを得なかった。

というのも、これまで道徳の授業づくりに苦慮し、「先人の伝記」型教材を自ら作成し実践してみたて分かったことだが、結論として言えることは「先人の伝記」教材には力がある、ということである。「先人の伝記」型教材を主に用いて道徳授業を1年間行ったことがあったが、その最終授業時に書いてもらった生徒の感想文に以下のようなものがあった。

「私はこれまでの授業全部がとても勉強になり、昔の人たちはこんなだったと分かって、すごく毎回楽しんできました。自分の思ったことと授業の人物の思ったことが同じだったとき、『ああ、昔の人も私たちが思うようなことを思っていたのだ』と共感する部分が何度もあり、びっくり

しました。偉人の話を聞いて、『自分もこの人のような生き方をしたい』とかいうふうに、自分と照らしあわせることができたというのも、私にとって、とてもよかったと思いました。どの授業もとても楽しくて、ものすごく学ぶことができました。本当にありがとうございました」（渡邊前掲書実践編、243頁）

「この授業を受けて、古人の人間のすばらしさというものがわかった気がします。今の僕に必要なことがあったり、かっこいいとかすごいなどと思ったりしたことがありました。僕はずっと社会の教科書にのっている人だけが、すごいことをして有名になったんだと思っていました。でも、たぶん自分が知らないだけだったと思うけど、こんな人たちもたんだと、すごく自分の為になりました。もっといろんな人の話を学びたかったけど、今日で最後だから残念に思います」（同上、244頁）

道徳の授業で生徒から「ありがとうございました」という言葉をもらったのは余り経験のないことで嬉しくもあったし、またこれによって「先人の伝記」型教材の力を実感した次第でもあった。

「先人の伝記」型教材については、近年アメリカで高く評価されているのではないだろうか。アメリカでは社会科学習の中で歴史上の人物を伝記的に登場させ、その人物がとった行動や態度が正しかったかどうか、価値の対立を経験させその理由を考えさせていくという道徳教育を行っているという。⁴⁷⁾

またかつてレーガン政権下で教育庁長官、ブッシュ政権下で国家麻薬取締局長を務めたウィリアム・J・ベネット（William J. Bennet, 1943-）が編纂した『道徳読本』（*THE BOOK OF VIRTUES: A Treasury of Great Moral Stories*）⁴⁸⁾が1993年に出版され、全米250万部のベストセラーになって話題を呼んだことがある。本書の内容は、「1 自己規律、2 同情、3 責任感、4 友情、5 仕事、6 勇気、7 忍耐、8 正直、9 忠誠心、10 信仰心」の徳目によって章分けがなされ、各章ごとに6~12の古今東西の寓話や説話、「先人の伝記」が配されている。本書で取り上げられた「先人」は、「ジンギスカン、カヌート二世、ジョージ・ワシントン、ソクラテス、アルフレッド王、ヘレン・ケラーとアン・サリバン、リンカーン、ブッカー・T・ワシントン、エジソン、ユリシー

ズ、スーザン・B・アンソニー、ローザ・パークス、ベネロペ、クヌート・ロックン、聖ニコラウス、トーマス・ジファーソン、コルベ神父」である。これはあたかも日本の修身教書のような編纂内容になっており、アメリカではこれが「第二の聖書」といわれているのである。

ベネットはまた学校教育における道徳教育の強化を主張し、これに影響を受けて全米で Character Education（人格教育）が1990年代後半から急速に展開し、子供たちの問題行動減少・学力向上といった成果を挙げてきているようだ。⁴⁹⁾そして、この人格教育では各教科において「先人の伝記」教材を使用して道徳教育を行おうとしているのである。⁵⁰⁾

我々はこのアメリカの道徳教育の動向に注目すべきであるし、また戦前まで「先人の伝記」を活用して道徳教育を行ってきた先人の知恵にも学ぶべきときがきていると思うのである。アメリカの思想家・詩人であるR・W・エマソン（Ralph Wald Emerson, 1803-1882）は言う。

「偉人の存在があればこそ、私たちの人生も光に満ち、真に豊かなものとなるのです。偉人たちの後光によって照らされた世界であればこそ、苦渋の人生行路もまた味わい深くなり、せちがらい世も生きやすくなるのです。／彼らは、私たちが、しっかりと足もとを見ながら生きていけるように、理想のカンテラを灯し続け、夜道を照らしてくれているのです。／この偉人たちの後を追うことこそ、まさしく青年の夢でしょう」⁵¹⁾

教師の誰もが子供たちに「夢」を持ってもらいたいと願っているはずである。そのためにも子供たちに「理想のカンテラを灯し続け、夜道を照らしてくれ」る「先人の伝記」教材を活用した道徳教育を多くの学校で実践してもらいたいと望むのである。

（註）

- 1) 下記の表は現在（平成22年）市販されているA～I全9社の中学校用道徳教育用副読本に使用されている「先人の伝記」型教材の数とその割合を記したものである。最も多い割合で「先人の伝記」型教材を使用しているのがB社（15.2%）で、最も低いのがF社（2.7%）である。A・B社を除いて、

「先人の伝記」型教材の占める割合が1割にも満たないというのは、とても充実しているとは言いがたい現状であるといえる。

「先人の伝記」型教材の数（副読本別・学年別）「先人の伝記」教材数，主題数，%

学 年	1 年			2 年			3 年			合計（1～3年）		
A社	3	35	8.6	2	35	5.7	7	35	20.1	12	105	11.4
B社	4	35	11.4	6	35	17.1	6	35	17.1	16	105	15.2
C社	1	35	2.9	4	35	11.4	2	35	5.7	7	105	6.7
D社	2	35	5.7	3	35	8.6	3	35	8.6	8	105	7.6
E社	1	35	2.9	2	35	5.7	2	35	5.7	5	105	4.8
F社	0	37	0	0	37	0	3	37	8.1	3	111	2.7
G社	3	35	8.6	1	35	2.9	3	35	8.6	7	105	6.7
H社	4	35	11.4	3	35	8.6	5	35	14.3	12	105	11.4
I社	0	33	0	1	33	3.0	3	33	9.1	4	99	4.0

- 2) 乙竹岩造『日本庶民教育史 下』（臨川書店，昭和45年，958～962頁）によれば，天保元年（1830）から慶応元年（1865）まで（35年間）の寺子屋3065校中，「修身」を教科に挙げていた寺子屋は59校とある。
- 3) 山下武『江戸時代庶民教化政策の研究』（校倉書房，昭和44年）276頁。
- 4) 乙竹前掲書，608頁。
- 5) 『日本教科書体系 第11巻』（講談社，昭和45年）419頁。
- 6) 同上書，429頁。
- 7) 丹和浩『近世庶民教育と出版文化』（岩田書院，平成17年）107頁。
- 8) 吉田太郎「寺子屋における歴史教育の研究」（『横浜国立大学教育紀要』第6号，昭和42年）50～52頁。
- 9) 石川松太郎編『日本教科書体系 第11巻』（講談社，昭和45年）96頁の「解説」によれば貝原益軒著とされるが「おそらく後人の仮託であろう」としている。
- 10) 同上書，456頁。
- 11) 同上書，471頁。
- 12) 同上書，477頁。

- 13) ニコライ著, 中村健之介訳『ニコライの見た幕末日本』(講談社学術文庫, 昭和54年)14頁.
- 14) 山下前掲書, 374~379頁.
- 15) 真木和泉守顕彰会編『真木和泉守遺文』(伯爵有馬家修史所, 大正2年)75頁.
- 16) 森田康之助『湊川神社史 敬仰篇』(湊川神社社務所, 昭和53年)635頁.
- 17) 山下前掲書, 442頁.
- 18) 山下前掲書, 311頁. 同書によれば、『大洲好人録』(大洲藩), 『四孝伝』(竜野藩), 『封内異行伝』(上野藩), 『玉露童女行状』(若桜藩), 『田辺孝子伝』(田辺藩), 『封内孝廉伝』(姫路藩)などが例として挙げられている.
- 19) 近藤啓吾『増訂浅見綱斎の研究』(臨川書店, 平成2年)231頁.
- 20) 同上『若林強斎の研究』(神道史学会, 昭和54年)130頁.
- 21) 平泉澄編『闇斎先生と日本精神』(至文堂, 昭和7年)65頁.
- 22) 景岳会編『橋本景岳全集 下巻』(畝傍書房, 昭和18年)1558頁. 「先生の逸事」として「付録」の中に記されている.
- 23) 山口県教育会編『吉田松陰全集 第8巻』(岩波書店, 昭和14年)340頁.
- 24) 同上書, 416頁. 安政2年2月19日久保清太郎宛書簡の中に記されている.
- 25) 久保田収編著『有馬正義先生遺文』(藝林会, 昭和45年)4頁.
- 26) 近藤啓吾『靖献遺言講義』(国書刊行会, 昭和62年)758頁.
- 27) 『夢の代』巻八, 雑書第八. 『日本思想体系 43』(岩波書店, 昭和48年), 444~445頁所収.
- 28) 『日本思想体系 31 山崎闇斎学派』(岩波書店, 昭和55年)586頁. 同書の「解説」で阿部隆一は「『靖献遺言』は崎門学派を問わず広く普及し, 後世この書の感化は極めて大きく, 闇斎学派即大義名分の印象を一般に与えた程である」としている.
- 29) A・B・ミットフォード『英国外交官の見た幕末維新』講談社学術文庫, 平成10年)25頁. 同書の中で維新期の4年間を日本で過ごした英国外交官ミットフォード(Algernon B. Freeban-Mitford, 1876-1916)は「1872年に出版された『日本外史』は, 12世紀に源頼朝が創設した幕府の歴史であった.

これら〔『日本外史』『大日本史』〕の本は、国中に興奮を巻き起こし一少なくとも知識階級においてだが一、それは鎮めるべくもなく、勢力のある大名たちは内乱を起こそう、その準備に熱中した」と述べ、『日本外史』の明治維新に与えた思想的影響力を指摘している。

- 30) 頼山陽著 頼成一・頼惟勤訳「解説」『日本外史(上)』(岩波文庫, 昭和51年) 9~10頁.
- 31) 『日本教育史資料』によれば, 明治4年(1871) 廃藩置県前に各地の藩校で「日本外史・日本政記並び用ひるもの 46/ 外史のみ用ひしもの 49」とある.
- 32) 頼山陽前掲書, 8頁.
- 33) 乙竹前掲書, 991頁. 同書によれば, 「読書」の教科書として3065校中126校(順位20位/652)が『日本外史』を使用していたとある.
- 34) W・Eグリフィス『ミカド日本の内なる力』(岩波文庫, 平成7年) 59頁.
- 35) 森田前掲書, 541頁.
- 36) 海後宗臣「道德教材の100年」(『海後宗臣著作集 第6巻』東京書籍, 昭和56年) 650頁.
- 37) 芳賀徹『明治維新と日本人』(講談社学術文庫, 昭和55年) 285頁. 高橋昌郎『中村敬宇』(吉川弘文館, 昭和41年) 82~83頁.
- 38) 平川祐弘『天ハ自ラ助クルモノヲ助ク 中村正直と『西国立志編』』(名古屋大学出版会, 平成18年) 121-137頁
- 39) 同上書, 79~83頁.
- 40) 『勸孝邇言』の内容構成は上下二篇に分かれ, 上篇は室鳩巢の『六諭衍義大意』に則って孝道の梗概が記されている. 下編は松平好房, 日野資朝の子阿新丸, 周の曾参など和漢の7名の古人の善行が掲載されている.
『近世孝子伝』には, 「長吉」「伝蔵」「万吉」など8名の近世の男児の孝子伝が載せられ, 「下総二童」の話が「付録」として追加されている.
『挿画本朝列女伝』には, 18名の歴史上の女性 que 取り上げられ, その婦徳善行が記されている. (海後宗臣によれば, 「『和語陰陽録』『修身談』『勸孝

邇言』の中で小学校教科書として多く使用されたものは上羽勝衛著『勸孝邇言』位であって、小学校修身教科書の大部分は外国書を翻訳してその内容としたものであると見て差し支えない』としている（海後前掲書，436頁）。

- 41) 海後前掲書，518頁。
- 42) 海後前掲書，516～521。
- 43) 吉田熊次「国定修身書の編纂」（国民教育奨励会編『教育五十年史』民友社，大正11年）247頁。
- 44) 平田論治『教育勅語国際関係史の研究』（風間書房，平成9年）160～161頁からの引用。
- 45) 高橋史朗・ハリリー・リイ『占領下の教育改革と検閲』（日本教育新聞社，昭和62年）95～96頁。
- 46) 蔡焜燦『台湾人と日本精神』（小学館文庫，平成13年）93・96・259頁。
- 47) 浅沼茂・松下晴彦「アメリカにおける歴史教育と道徳教育の統合」（『比較教育学』No.15，昭和64年）136～146頁
- 48) William J. Bennet, *THE BOOK OF VIRTUES: A Treasury of Great Moral Stories* (New York, Simon & Schuster, 1993, 832p). 邦訳に大地舜訳『魔法の糸』（実務教育出版，平成9年，672頁）がある。
- 49) トーマス・リコーナ著，水野修次郎・望月文明訳『「人格教育」のすべて 家庭・学校・地域社会ですすめる心の教育』麗澤大学出版会，平成17年）179～182頁。
- 50) 同上書，192～193頁。
- 51) Ralph Wald Emerson, *Representative Man* (New York, General Books, 2009, 166p). R・W・エマソン『エマソンの「偉人論」—天才たちの感化力で，人生が輝く』幸福の科学出版，平成21年）280頁。